

人間（４）

1. 太陽の光を浴び、爽やかな風に吹かれ、水（海、川）を感じられる場所で、流れる風景と遊ぶ。人間には、そんな何でもないことがとても大切で、生きることの普通を、そのことが自然に支えてくれる。

しかしそれは、人間という身体レベルのことで、生命としての生をテーマとする時、そこには、全く次元の異なる本質がある。人は、そのことを知り、人間を生きることと生命を生きることを同一とした生を、人として生きる。それは、太陽の望み。自然界も、そのことに安心する。

その意識もなく細胞が辛くなる暮らしを重ね、無自覚にそのことによる負の影響を外へと流している時、人は、海や山を癒してもらえる存在として勝手に捉え、個人的にその姿を利用する。そんな時、人は、自然環境に包まれ、心身はリラックスを覚え、そして頭を働かせる気もなくなって、ぼんやりとした時間を過ごす。休息の中、うたた寝もする。

本心とは裏腹の自分を生き、そうであることも分からずに良い人を演じている姿がそこに在る時、人は、太陽や青空の下で、気づけばボ～っとしている。その気もなく体裁を整え、人との間では何かと建て前を大事にしていることに何の違和感も覚えない人は、山や海の在る風景で、いつのまにか頭が空っぽになったみたいに（知覚が鈍ったみたいに）、気持ちがゆ

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

ったりとして、くつろぐ感じになる。それらの状態は、実は、本来への抵抗の現れである。見た目は自然界との融合でも、中身は、自然界への拒否反応である。

2.人間の姿は、形ある世界仕様のその元となる形無き存在の意思の表現体であり、人は皆、その意思の性質のままの感情を原因とする人間時間を生きる。その別次の意思は、いつの時代も、人間の脳(意識)と一体化した生を生き、時代環境に合わせて、身体との共同作業のようにして、好きなように事を生み出し、経験する。

現在の人間の姿は、その現代版であり、その殆どが、世の心ある価値観に合わせられる身体(思考)と、そうではない(それを望まないが、都合良く利用し得る)形無き意思のその原因の影響力を同一に重ねて、人生を生きる。本当の自分は、その形無き後者である。

その形無き本当の自分は、一体化させた人間のその意識の原因として、自由に人間時間を愉しむことを普通とするが、無意識の意思や本性(の遺伝子)の思惑といった観点からでも、その性質は捉えることが出来る。つまり、そのつもりもなく行ってしまうことや、人知れず影響を及ぼしていることのその理由となるのが、日頃全く自覚できない、その本当の自分の意思であり、思惑なのである。

もちろん、それも自分。事は、その手前から無意識に動き出していて、その経過の姿は(人間の脳では)把握し得るところ

には無いが、自らの身体を通してそれは為されているわけであるから、そう感得し得てもそうでなくても、それは自分ということになる。その原因のところでの実際が、自然界の中で自然に顕になる。

3. 生命としての自然な変化を拒もうとする、滞りや衝突の原因を密度濃く備える無意識(本性)の意思は、身体(脳)に、そうとは分からない嘘の感觸と理解を経験させて(植え付けて)、変化とは無縁でいる状態を完璧に維持しようとする。

その意思が嫌う、太陽の光で温められた場所では、ボ〜っとして眠気を覚える体験を人間に心地良いと思わせ、全ての生命を変化・成長させようとする太陽の原因の力を遮断する。自然の中で不自然に脳(身体)の活動を鈍くさせ、変化を遠ざけるその負の原因を重石として、自然に残す。状況的にそれが難しい時は、逆に思考を忙しくさせて、感覚を押さえ、その意思を形にする。

青空の下でも、海や川が見える場所でも、無意識の意思(本性、本体)がそれを拒もうとする時、人はボ〜っとして、眠気を覚え(脳の働きが鈍くなり)、心地良く、そこでくつろぐ。別のもう一人の自分の姿でもあるその意思は、青空の下に居ても、青空を見えなくさせ、海を見ても、海を感じさせない。リラックス感も、感じるままではなく、思考と身体の満足としてしまう。

「歴史の芯」の後半途中から繰り返し何度も登場した、本

体という、身体の次元を自由に操る、姿無き(無生命的な)存在の意思。人間は、そうあるべき自然との関わりを失くし、嘘を本当に、不自然に生きる。

4.人間は、太陽や青空の下に居ると、それだけで心身は活動的になり、そのことで自然と増幅する理由の要らない喜びを燃料に、自然体の心が躍動する。海や山でもそうで、自然界が安心する人の暮らしの中でも、人間は、普通に心を元気にする。

その元気は、不調や不安の裏返しのそれではなく、病んだ原因が癒されようとする時の、その反動による感覚でもない。この地球で、自然界の一部として生きる人間は、太陽が好きで、青空と一緒に、海と遊ぶ。山も川も、森も平野も、自分の分身のように感じ、どこに居ても、普通自然体の安心と余裕が、そこには在る。

その普通を失くした(持たない)人間は、人は誰もが病気になるもの、と考える程、自然界に生きる一生命としての生き方を忘れ、自己の都合で自然界を扱い、自己を優先して、それを利用する。そんなだから、自然界の自然な力が自分に及ぶことは酷く嫌悪し、それを遮るために、自然の中ではボ～っとする。自然界が喜ぶ中庸のテーマにも、形ある結果を望まない原因のままの姿勢にも、彼らは、ぼんやりとして、思考が働かなくなる。

心身の疲れへの癒しやリラックス効果のためにと、非生命

に使われる。思考が、全く新しい仕事をする。

無有は、理由の要らない平和と健康の原因を変化に乗せ、それを成長させつつ、送り続ける。向かわず、求めず、思考を働かせなければ、平和と健康の方から手招きをし、そこへの道を教えてくれる。人が、生命としての人間を真に生きる時、心ある原因に付き合う思考はあっても、思考から(考えることから)始まる思考など初めからどこにも無かったことを知る。
(by 無有 5/24 2018)

れを止めたとしても、それまでのその負の蓄積の影響で、どうにもならなさ(の感情)を人に押し付け、自暴自棄に近い精神状態を基本に、無責任そのものを生きる。この世で、思考ほど、その危うさを人に分からせずに負の影響を及ぼし続けるものはない。だから、そんな自分をムリなく切り離し得る無有日記の世界を実践する。この地上に居て、他の生命たちと共に調和と友愛の原因を生きる人間であることを忘れてはならない。

頭から始まり、頭で終わる思考の世界は、心を育まなくても、心ある自分を偽装して生きる人間たちに、そのための妙な力を与え、存在感を持ち続ける。そこで、思考を忙しくさせる姿は、その人が、人間らしさを放棄していることを意味する。それを無くす。「人間」は、本気で生き直しをする人のその確かな原因を高めていく。

思考を働かせない自分を安定させるのは、その人の仕事である。不安も怖れも、差別心も嫉妬心も皆、それらを上手く隠し得る思考の力を何より喜ぶので、頭が不要に働かなくなる、原因のままの無有日記に触れ続け、内に潜む否定感情のその負の原因を、自らの責任で浄化していく。無有日記の世界の実践は、思考を使うまでもなく動き始める人間本来の原因の実践であるゆえ、それ無しで時間ばかりかける経験は不要とする。気づけば、思考を使うことが違和感となり、脳が変わる。その時、その新たな人間経験に、それまでとは次元の異なる、生命を生かす生命としての思考が参加する。それは、普通本来の心ある風景を元気にするために、いくらでも、その人

的に自然界に負荷をかける彼らは、自然界が何より望む、不調や病気の原因を作り出さないということには、無頓着である。その非人間性を普通とする、異常な本性(本体)の意のままの姿は、好き勝手に自然に触れ、自然を蝕み、そこに不自然さの原因を注ぎ込む。その時、その存在の意思が得意とするのが、頭をボ〜っとさせることと、眠気への誘い込みであり、時に執拗に考え事をさせて、思考を無責任にすることである。

5. リラックスは、ボ〜っとしてくつろぐことではなく、心身が軽く、自由に動けることである。そうであると、リラックスするための時間が不要となり、いつでも、どこでも、普通にリラックスしている自分がある。そのことを、生きる姿勢の基本とする。そこから離れてしまうと、自然界の自然治癒への働きかけも、自分から遠のいてしまう。

その状態を安定させるために、どこに居ても、どんな時でも、ボ〜っとしないようにする。睡眠は、夜、心身の休息として自然に為されるものだから、日中は、眠気にも誘われないようにする。

ある時、ある場所で、ボ〜っとしてしまうと、何気ない疲れの原因は奥に染み込み、それは慢性化する。ストレスを抱えてしまっていることで、ふとうたた寝をする時、その負の原因は処理されないまま、心身の状態は悪化する。それよりも、細胞が喜ぶ食事(全粒穀物食)を摂り、思考を自由にさせ、自分の時間を大切にする。ボ〜っとしてくつろぎ、気持ち良く眠ったとし

ても、それは原因無視の思考の域で、本来ではない。

考え事をし、思考を忙しくさせることも質は同じで、それは、リラックスを嫌う無意識の意思が主導権を握っていると思っ
てよい。そこに感情が重なれば、事の好転は望めず、心身は、
不調をあたり前としてしまう。考えてばかりの人も、ボ～っとし
ている人も、そこに潜むのは、自然界を嫌悪する危うい性質
の意思である。それを外し、人間らしい人間を生きるために、
そのどちらからも自由になる。無有日記を、思考を自由にさせ
つつ感じるままに読み、そこで一切ボ～っとしなくても、そ
のエッセンスは身に付いていく。

6. 何をしてもどうにもならず、いつまでも同じ繰り返しで変わ
れない(変わらない)のは、同一化してしまっている別次の意
思(本体)が、それを決して許さないためと考える。ただそれも、
自分自身であるゆえ、自覚を持って、その不穏な意思の力を
外す。無有日記は、どこまでもその支え役になる。

ボ～っとしてしまう時、そうにはならない自分を選択すると、
その存在の意思は強力に動き出し、時に非理・非情な感情ま
でが押し寄せる。それでもボ～っとしなければ、これまで心身
の中に染み込んでしまっていた負の原因が、違和感や痛みを
伴って現れ出す。それは、その意思のかたまりにヒビ割れが
生じ、少しずつ砕かれようとしていることを意味する。自然界
が嬉しい「LED フォトブック」との融合を重ね(足から始まる)、
その無くてもいい別の自分を、段階的に外へと押し出してい

覆い隠す、その外枠と考えてよい。

思考は、不安や心配事を燃料に病気や争い事(衝突)を作
り、それを処理するための方法を作る。思考は、本心とは裏腹
の体裁や建て前を大切にさせて、人との関わりを難しくさせ
(不穏にさせ)、それへの対応を生み出す。それは、思考が人
の健康と安心の暮らしを破壊する武器であり、嘘の人生を支
える土台であるということ。思考は、非人間的な現実を生み出
す(自作自演級の)嘘芝居の、その強力な病みの道具である。
思考が止まらず、あれこれと考えてばかりの時間は、人間とし
て、それ程の愚かさや残忍さは無いと考える。

そう考えると、人々が思考を忙しくさせることを経験しなくな
ったら、それだけで、世は健全で平和なものになることを理解
する。要らない思考が働きやすくなる知識や情報の世界から
自由になり、経験や記憶(過去、結果)からも自由でいる。中
庸をベースに、思考型の負の原因を浮き上がらせ、中庸その
ものの中に居る。それまでのように思考が使いなくなれば、や
っと人間を生き始められることになる。その支え役の無有日
記を活用し、「人間」と「太陽の音楽」、そして「仏陀の心」を自
分と重ねる。思考世界は、地球自然界がどうにも対処し難い、
最大級の困り事。その無くてもいい負のかたまりの芯を外す。
頭を忙しく、思考を使い続けるという嘘の人生を、わざわざ人
間が経験することはない。

頭ばかりが忙しく、考えごとに明け暮れる生活を普通として
いると、その人は、永遠に変化とは無縁でいることになり、そ

と認識する。思考はいつも、それまでの経験枠を出ず、個人の都合が優先されて、動き出す。それゆえ、それだけで、無くてもいい出来事が生まれやすくなり、人は困ることになる。(無意識の意思(本体)はそれを望んでいるのだが…)そして、その出来事(問題事)に対処しようと思いを働かせ、偽善を生きる。思考の忙しさは、普通でいることが難しいという異常さを普通とする人の、その存在そのものが災いであることの現れである。付き合わされても、付き合わず、思考を刺激されても、思考を自由にさせる。思考は、実に恐ろしい病みづくりの原因であることを知る。

思考の忙しさ(頭で考えること)を常とする人は、人としての知恵を持たず、感性も、人間(本来)のそれではない。短絡で単純で(単細胞で)、頭の回路は蛇系のそれと言える。それゆえ、覚えたことだけを頼りに、覚えられない(感じ取れない)ことを忌み嫌い、その世界を本能的に潰そうとする意思を働かせる。その時、思考が活躍する。

思考の強い人にとって、人間経験の基本となる、中庸や全体、生命本来という世界ほど嫌なものはない。心ある現実を生み出す形無き原因のそれらは、思考を不要とするため(思考がじゃまになるため)、思考で生きている人には、意味不明なものとなる。思考は、内面の変化・成長とは無縁であることを基本とするため、その内面の姿(本質)が顕になってしまう中庸や全体の発想は、恐怖でしかない。そのことで動き出す、非情な原因の力。思考型の脳の働きは、内に秘めた凶悪さを

く。別の自分が力を無くせば、本当の自分が新たに更新される。

自然界を嫌い、変化を拒もうとする存在(本体)の意思は、リラックスの真の意味と、その影響力を恐れる。だから、ふと眠気を誘い、ゆったりとした時間を演出するわけだが、その中身は、不調を安定させ、停滞を生み出そうとする性質であるゆえ、その仕掛けにはかからないようにする。

何気に安心感を覚え、ポ〜っとする時、そこには、変わらないままの不安の原因が無自覚に残る。太陽の光で温められた場所で眠れば、太陽の生命源の原因を遮ることになり、その気もなく、自らの生命の意思は不安定になる。心身が楽になっても、それが無自覚に溜め込んだ疲れや不調を土台とするものであると、同じことを繰り返す。それよりも、いつも楽で、気持ちが自由で、何があっても、どこに居ても、不安や不調からは縁遠い自分である。

そのために、嘘のリラックスを返上し、リラックスをあたり前とする自分を生きる。ポ〜っとしないこと、うたた寝をしないこと、思考(感情)を忙しくさせないことが、それを容易にする。

7. 暖炉の側に居ると、ポ〜っとして眠くなったり、水浴(水泳)をした後に、思わず寝てしまったりする姿は、その殆どが、火や水を嫌う、意識と重なる本体(本性の元)の拒否反応の現れであり、眠気へと身体を引き込むことで、その意思は、それらとの融合の時を壊そうとする。こういう時はどうしても眠くなると

いう時のその理由となる背景には、その空間での自然な変化を阻もうとする、別次の意思の異様な働きかけがある。

睡眠時間帯とは異なる日中のどこかで、ふと眠気を覚える時、そこに引っ張られないようにするだけでも、心身は、更なる負の原因を溜め込みにくくなり、蓄積したままのそれまでの未消化の経験の記憶を、少しずつ浄化し得る時を生み出す。誰かが近くに居るわけでもなく、何か特別にしなきゃならないことがあるわけでもないその時に、考え事ばかりする自分が居れば、そこから離れてただ歩くために歩いてみるだけでも、それを嫌がる別の自分(本体の意思)の、攻めのパターンのようなものを把握し得る時が訪れやすくなり、脳の使い方に責任を覚えるようになる。

ボ〜っとしても、頭が忙しくても、そんな時の自分は、その状況がどんなであれ、不自然さを地で行く不穏な(原因の)存在であるということを知る。それは、その時、そうではない自分を選択・実践すれば、体験的に自然と知り得ることである。

やむ無く眠気を覚えざるを得ないこともあることはあるが、その例外的な場合は、日頃から眠気を外し、心地良さとそれを結び付けることのない自分を普通とする中で、何気に、何の負荷も無いところで感じ取れるものである。どこに居ても、何をしていても、ボ〜っと眠気を覚えることのない生活空間をあたり前としていく。

8.溜まった疲れを癒すために休息を取る必要性が生じ、そこ

思考には、長年の癖のような姿勢(性質)が在り、思考を自由にさせ、経験からも自由でいる普通の人に対して、自らの思考(の繰り返しパターン)をしつこく、いつまでも付き合わせるというのがある。病的な悪趣味のようなそれは、本性の為せる技。辛い、厳しいという感情を利用して、人の人生に要らない負荷(重石)をかける。その凶悪で残忍な無意識の意思は、「人間」の文章で、力を失くさざるを得なくなる。

この時代だから扱えた、「人間」の文章。「歴史の芯」に在るような世界を二度と経験しない(させない)ためにも、この時代に、思考を外す。考えて変われる(変えられる)ように感じるのは、本当は何も変える気が無い本心(本性)が、それで良しとする思考の満足を手にしているから。思考を働かせ、頭を使って考えても、平和や健康の原因は動かない。

人間であれば、思考を忙しくさせるという異常なことを経験することは出来ない。平和そのものの原因(心)を生きれば、それにさりげなく付き合う思考が、自然と協力する。あたり前に健康の原因でいれば、そうである自分を支える思考が力を手にする。それ以外の思考は、全て無くてもいいもの。(自然界にとって危険極まりない LED 照明が存在し続けることから、それは分かる)心ある原因の質を変化・成長させようとはしない、思考型の人間のその脳の働きは、自然界の生命たちが最も辛くなる不自然な原因である。

頭を働かせ、思考を忙しくさせる自分がそこに居るとすれば、「今私は災いの元を生み出し、人を困らせようとしている」

づけば、人の暮らしは、重苦しい負荷を帯び、それまでには無かった、頭(思考)を働かせるという時間を経験せざるを得なくなる。思考の忙しさは、破壊と停滞を難無く生み出す。それは、その気もなく(狡賢く)為される、生命世界への犯罪と言える。

「人間(4)」で、人間時間を思い通りに操ろうとする本体(本当の自分)の、その巧妙な意思表示に対処し得る自分を実践できたら、この「人間(5)」の文章で、思考の忙しさのその原因のかたまりを砕く。思考は、不健全さと争い事を支えるしつこい負の原因。自然界に生きる人間として、真剣に、覚悟して、思考を働かせない時間を安定させる。それ無しでは、いつまでも人間を生きられないでいることになる。

ある問題事や思考を刺激される出来事が縁ある風景で生じた時、そこで頭を忙しく、考えてばかりの時間を持てば、それは、心の嘘の上塗りになる。自分の変化しにくさに、「なぜ?どうして?」といった発想を持てば、その分、人を悲しませる(苦しませる)無意識の意思は強力になる。自らの、変化を嫌がる本心に向けた勝手ペースの「なぜ?」は、思考の中では、重量級の凶器。キレイ事の裏で他者の人生を奪おうとする意思の現れでもあるそれは、繰り返すことで、人の健康と平和な想いをズタズタにする。かつて恐ろしい程の非情振りを経験した時の、その原因(感情の記憶)を内に潜める人ほど、思考を働かせないようできて、思考を本体(別次の自分)に操らせる。そのことを常識とし、思考の病みを浄化していく。

でボ~っとしてしまうことがあるが、大切なのは、そうになってしまう状況の、その原因への対処である。睡眠の質が低下して、心身が不安定になり、日中の睡眠でそのことを補わなければならないことがあるが、大切なのは、そうならないための原因の選択である。

それらの原因は、休息を取り、ボ~っとしても、睡眠を取っても、変わらない。楽になったようで、中身は何も変わらず、変わったようで、その原因はそのままである。無くてもいい現実のその原因の浄化も、そう在るべき新たな現実のその原因の創造も、ボ~っとしなないことで動き出し、眠気から離れていることで、具現化する。それは、生命としての生を生きる人間に与えられた、地球時間における知恵である。

地球の陸地の基本形は、地面(地表)までであり、地上での営みは、そのおまけのようなものである。そして、地上で生きる生命たちは皆、地中(地球)からの植物の生命力を糧に生を生き、生を終えて地中にその全てを返すことで、自由に生きることが許される。太陽は、その姿を光と熱で支え、海は、川と共に、その水で土を活かす。

その基本を知る時、人は、太陽と海を身近に感じ、自然界との一体感を覚える。そこに特別なものは何も無く、ただ一生命としての人間を生きるその生の大切さを、誰もが自覚する。その時、人は、太陽に優しさを覚えるという感覚を遠くに、自らが太陽のような優しさを生きる。海や山の温もりと同じように、自らも、温もりのある空間を創る。それが人間である。そうではな

い時に生じる、(人間だけが嬉しい)ボ～つとする感覚も、頭の忙しい時間も、縁遠いものになる。それは、太陽の嬉しさであり、地球自然界の安心である。

(人としての生きる原因が大切にされていると、時に、踏み込まれては欲しくないエリア(価値観、組織 etc.)の拒否反応に、ボ～つとすることがある。それは、不要に絡もうとする姿無き存在(本体)が、その同質となる対象に違和感を覚えさせない意図によるものと考え。自由な原因のままの(思考では扱いにくい)音やリズムとの融合にも強い反発(憎悪)を示すその意思是、眠気という形で、(その本質となる)怯えと狡さを顕にする)

9.そして、この4章の内容を実践する中で、いつのまにか経験していることになる、新たな普通。それは、余りにさりげなく、自然なことであるため、どこまでも自覚しにくい。それもそのはず。それは、脳の中の微妙な変化。微妙であっても、とても重要なそれは、ずっと永い間その自由な働きを妨げられていた部分の、活動再開とも言うべき、望むべく変化。人は、その時を、大きな喜びとする。

人間の脳は、意識を支配されたまま、普通ではない状態の時をずっと連ねて来ているが(「歴史の芯」)、そのために尽く本来の活動を阻まれてしまっていたのが、すでに述べている右脳であり、その働きの(物理的)枷と化していた脳りようと、健全な身体表現の原動力となる視床下部である。他にもいく

を作る。平和と健康をあたり前とする動植物たちは、思考を忙しくさせる(考えてばかりの)人の、その無責任な姿勢に、強い違和感(危機感)を覚える。

事あるごとに理由探しをする思考の特性は、そうである現実をそのまま受容することを頑なに避け、自らも関わる物事の原因への責任を経験しないまま、人生をムダに生きる。その事実も、身勝手な思考を忙しくさせるために、彼(彼女)らは理解できない。その分からなさを認めることへの怯えから、本来無くてもいい依存心(ご利益心)を強め、責任転嫁も常とする。思考の強い人は、人としての変化を嫌い、他者の変化を止めるその負の原因で、人にそうとは分からせない巧みな思考を働かせつつ、非人間性を地で行く。

誰も平和の意味を知らず、平和そのものの風景を皆であたり前に支え合う世界では、頭で考え、どうにか処理しなきゃという現実のその原因からは縁遠いところで、本来の普通を生きる。考えなくても分かり合える大切なことを、共に育み、成長させ、その原因を自然界と融合させる。それは、自然界の望みそのもの。そうであろうとすることもなく自然体でいる人たちの、その柔らかな想いによって、動物も植物も、生き活きと生きる。思考という概念は、そこには無い。

そこに、思考を忙しくさせることを常とする(頭を使って考えることを習慣とする)人が加わった時、そこでの普通は壊れる。平和や健康のその原因でい続けることを怖れる思考は、平和を支える風の動きを止め、健康を育む水の生命力を奪う。気

2. 思考の忙しさは、それ自体が、人の世に在ってはならない、人間の危うさと考える。それは、心ある人たちが何より望む、理由の要らない(何の裏返しでもない)平和を遠ざけ、争いの絶えない不穏な社会環境を支える力になる。あれこれ頭を働かせ、思考を絶えず動かす時間は、人間本来の自然な在り様に尽く抵抗する意思がそこに在るということを知る。

思考は、悪知恵と相性が良い。本来、それは、心ある風景の(原因を支える)素朴な想いに付き合う脳の働きを言うが、その思考が想いよりも先に前面に出ると(思考が主導権を握ると)、心のごまかしが始まる。その気もなく心ある振りが普通となり、考えて分かることを以て考えても分かりにくいことを否定し、心を偽装する。頭では、心ある自分を信じて疑わず、嘘を本当に、心の世界とは無縁となる。

自然界の自然な姿を観れば普通に分かることだが、人間も含めた、この地上で生きる生命たちの世界での平和というのは、他を隔てる性質を含む人間の思考の働きとその原因を、決して寄せ付けない。そこでは、ただ、そのままありのままに生きる自分たちの原因が平和そのもののそれとして自然と維持されていれば良いわけで、それを本能的に知る動植物たちは、いつ、どこに居ても、自らの分を生き、自然界でのその自然な営みを支え合う。

普通であるはずの自然界との融合も、頭(行為)から始まる人間の思考は、それを、そうとは分からないよう(そうであると理解出来ずに)抑え込み、彼らが哀しむ風景を生み出す原因

つもあるが、この3つは、心ある人間時間での生命の意思表現という観点では、担うものの次元が違う。非生命的な存在の思惑に付き合わされた人間の脳は、右脳を牛耳られ、それと視床下部との連繋の仕事を抱う脳りょうを不自由にさせられる。それらが、奇跡という名の普通の中で、生まれ変わろうとする。

これまで普通とされてきたことの、その背景となる理由とその原因が、地球自然界の望み(意思)を基とする EW によって動き出す時、そこに在る、世の普通とされる(されてしまっている)不安や怖れ、争いや衝突(病気、問題事 etc.)の原因は、それまでのままではいられなくなる。その際の、自浄力を高めるべく原因の処方かボ〜つとしないことと、思考を忙しくさせないことである。日中、一切の眠気を外し、居眠り(うたた寝)をしないだけで、脳は変わる。そして、無くてもいい不調や不安のその発信源のようなものを感得し、それらを外す自分が居る。脳は、永い時を経て、人間のものになる。

10. 心身の不調の原因が存在しなかった遠い昔、人間は、その普通を繋ぎ、支え合うために、自然界と共に、自然体の生をあたり前に生きる。当然そこでは、現代にあるような胃腸の疾患や腰痛、ひざ痛の類は誰も知らず、器官や機能、感覚(子宮、目、皮膚 etc.)の不調も縁が無い。無有日記を通して何気に生み出される意識が、未来が喜ぶ自然体(中庸、全体)のそれとなる時、心は、遠い昔の自然界が備える、その力強い

普通との融合を経験し始める。

争いも病気も無かったその頃、足の指は、地球感覚の基となり、仙骨は、人間生命を繋ぐ(守る)仕事を担う。腎臓と肝臓は、身体活動の本来を支え、その全てを知る脳は、右脳を中心に、一生命としての人間経験の時を生み出す。地上(の次元)が不穏なものになる中で、その健全な働きを集中的に病まされたそれらは、この現代に、かつての経験(遺伝子)の記憶を復活させる。心は、そのことを何より嬉しい。

LED フォトブックで、地面(地球)からの生命力を好きなだけ身体に流し得たら、「人間(4)」との融合に、腎臓と肝臓、仙骨と足の指を参加させる。そのことで、治癒・自浄への自然な働きかけとなる自然界発の普通は、その原因のところからの動きを伴って、具現化していく。「仏陀の心」で、本体の性質に触れ、「歴史の芯」で、その切り離しと創造(生まれ変わり)への原因を高め得たひとりひとりの存在の性質は、「人間」を通して、歴史的生き直しを可能とする。「人間(4)」で、地球感覚を自然体とするその原因の仕事は、自動制御になる。

11. 時間の使い方の、その質が大きく変わる、「人間(4)」以降の、何気ない人間時間。居眠りしないというのは、それだけで、どうにも対処し難い無意識の意思の性質を変化に乗せ、経験から自由になれない現れでもある、感情や思考の繰り返しパターンにまで、その作用は及ぶ。何かの裏返しの経験ではない、生の仕切り直しのような、生命本来の時。ボ〜つとす

そこでは、対処しなきゃならない問題事も、誰もがその原因から離れていることを普通とするので、どこにも無い。責任の次元が違う。だがそれが、人間本来の社会の普通である。人は、誰もが社会の一員として社会を支え、支配や権力といった概念も、それらが思考に住み続ける経験を、人は知らない。(子供時代に子供心を育まなかった人の、その経験(感情)の記憶が原因となって引き起こされる、彼らに都合の良い争いや病気(衝突、隔たり、偽善 etc.)も、そこでは、居場所を無くす)

子供の時に、共にその原因を育み、みんなで元気にする、調和や友愛(健康や平和)の土台となる子供心。その心の基本となるものが、人の中に普通に在れば、政治も経済も、教育も宗教も(文化も環境も)、問題は無くなっていく。それは、人間にとって、とても単純で、大切な普通。人間であれば、それを無視することは出来ない。

政治や経済の絡む世の問題事の全ては、子供時代に子供らしい経験を重ね、嫉妬や差別とは無縁の子供心を共に育むことで、面白いぐらいに、その姿を変えていく。不安も心配事も無い子供時代は、社会の基本。それを守るのが、社会の仕事。そこから自然と生まれ、形になる役割(立場)は、始まりも終わりも無く、ただそのまま、みんなのために、共に繋ぎ、支え合う。大人たちの子供心は、何の裏返しでもない(理由の要らない)健康と平和の原因を、普通に成長させていく。

ば、政治や経済が、人としての普通感覚を忘れた不穏なものになることはない。友と自由に遊び、好きなだけ戯れ、おしゃべりをして、理由の要らない喜びと楽しみをみんなで共有すれば、不安発の出来事も、隔たりや不公正を生み出す決まり事も、生まれなくなる。

それらを尽く無視し、遠ざけて、子供の頃から、見た目(体裁)や結果(他との差)重視の世界に身を置く子が居るから、政治がみんなのものではなくなり、経済が、形ばかりで中身の無い不自然・不健康なものになる。社会の問題事のその原因は、子供時代に作られる。

人としての人間本来からなる普通が壊されたままであるために、この国は、生きる自由と平等の精神が尊重される世でも、人の生きにくさや動きにくさが繰り返し生み出されるといふ、歪な(未熟な)政治が繰り返される。その病み続ける世に合わせて、自らの危うい本性を満足させようとする存在は、幼少時から、自分が、一生命を生きる人間であることを放棄する。彼らは、自分のために人を利用できる立場(地位、肩書き)を手にするために、子供の時から、人間が持てないはずのその醜い意思を、上手く形にする。

役割としてでしかない立場は、人としての在り様を普通とする人が、気負いも頑張りも不要とする中で、さりげなくその役を担う。そこに、課せられる責任は無く、ただ人としての責任ある原因が、その人を通る。それを人々も知り、共に生きることのその滑らかな流れのために、その必要性として、役がある。

る時間を無くし、眠気に付き合わされずに居ると、仕組まれた心地良さの中の危うさがよく分かり出し、夢や思考にまでそれが入り込んでいたことも余裕で理解する。気づけば、心が遅くなる。

そして、段々と経験するようになるのは、居る場所や人(物事)との関わりを通してふとそのことを気づかされる、生きる原因の変化・成長とその安定。人や空間がどんなであれ、常に心は主導権を握り、想いは、流れるように心ある未来と繋がる。その原因は、縁する風景(人、もの、環境 etc.)のそれに正直に反応し、滞りや不健全さの原因を浮き上がらせて、その出所を絶つ。思考を不要に使わせない中庸の原因のままの無有日記に触れつつ、眠気を遠くに置けば(ボ～っとしなければ)、その基礎は力強くなる。

この「人間(4)」との出会いを、自然界が喜ぶ、一生命としての人生の再スタートの時とする。その実践を通してのひとつひとつの経験は、縁ある風景のその元となる原因を変え得る風となり、新たな時へとその原因を修正・浄化する光となる。ここから、この時から、地球自然界の色は変わり出す。(EW を進化させる中で、胸椎上部や鼻、眉間なども、それに参加させてみる。それらは、永いこと病みづくりに利用された場所である)(by 無有 4/30 2018)

人間（５）

1. 人の住む世界では、共に生きることのその役割上の立場として、人々の中心にある人が居ることはあっても、そうではない、人が人を支配する立場として、そのことが存在することはない。有るとすれば、それは、共に生きることの大切さが崩れ、壊れてしまっていることを意味する。政治でも経済でも、それぞれの社会生活でも、人が人としてそこに居れば、支配欲や権勢欲からはあたり前に縁遠いところで、人間はそれを共有する。

その人としての基本からなる様が力無く不穏なものになることを、人は放っては置けないのだが、内なる非人間性を形に、狡賢く（欲深く）生きようとする心無い人間は、その不穏な世を土台にいかに生きるか、と負の連鎖の接着剤のような人生を送る。彼らは、そのための立場や地位を利用し、人々に影響力を及ぼせる場所で、自己満足に浸る。

不健全な原因がしつこく潜む世で成り立つ、不公正な政治と不自然な経済。そしてそれらに支えられる、心（原因）の性質が無視された、教育と文化。それらをそのままにしないために大切となるのが、素朴な子供心を基とする（その原因からの）健全な感性と違和感であり、そうではない現実の、その原因の選択と実践である。それ無くして、人が事の内実を変えることは不可能で、その大切さを普通とはしない人のその個人的

な思惑により、変化とは縁遠い世が不自然に安定してしまうことになる。

人は皆、好きなだけ自然と戯れ、共に遊び、そして自由に動き回るそれぞれの子供時代のその経験を、調和と友愛のその形無き原因（基本）とする。ところが、不思議なことに、それを嫌悪する異様な意思を備える子が居る。彼らは、子供時代に育むべきことに背を向け、そこで有ってはならない自己本位の感情を強めていく。

それは、人間時間をその意思表示の道具として操ろうとする、姿無き存在（本当の自分）の、現代仕様の手段。そこに在る支配・征服欲を形にするためのその準備として、当然のようにして子供時代の子供らしさを退け、（心ある表現の基礎である）子供時代には当然無縁であるはずの差別や優越の世界で、狡賢く個を生きる。

彼らは、その歪な経験全てが正当化される世のその基礎となる生き方で、それを支え、同質の存在たちが作り上げた不穏な社会の、その不健全さに守られる。その後、それを放って置ける立場や地位を上手く手にし、大小様々な人の空間において、その中心となり、負の影響力を及ぼす。彼らにとっての子供時代の子供らしさの無さは、その非人間的な本性からなる支配・権勢欲の材料としてあり、巧妙にそれが具現化されるためにある。

子供たちが皆、子供時代に、その時ならではの遊びを中心に、子供心を元気に（生命溢れる）想いを活躍させて過ごせ